

コミュニケーション空間としての下北沢

平成18年1月16日

原告 下平憲治

1 はじめに

私は、長野県出身です。1980年から歯科医を目指し大学生として上京し、北沢4丁目にアパートを借りることになりました。以来、5回くらいの引越しをしましたが愛着がある街を離れられず下北沢近辺を回っています。

現在私は、代田6丁目の藤城矯正歯科クリニックに勤務していますが、歯列矯正専門の歯科医として地方でも診察をしています。住所は、北沢3丁目〇〇番〇〇号です。

2 私にとって下北沢とは

私は、中学時代よりロックをこよなく愛し、歯科医になると決めてはいましたが、進学する大学はロックを体感できる東京以外は全く考えておりませんでした。

長野県の田舎から出てきたロック少年にとって聖地として思い続けた下北沢に住むことは夢の第一段階の達成です。路地の入り組んだシモキタの街中、憧れのプレイヤーが出演している下北沢ロフトを南口で発見した喜びは今も忘れません。

幸運にも多くのミュージシャンと知り合うことができ、自身もバンドを結成し、ライブハウスで活動をしておりました。夢を追い求める第二段階に移っていったのです。しかしながらあまりにも優秀なプレイヤーと知り合いすぎた結果、自分と彼らの力量の差を痛感するようになり、いつしか彼らをサポートする側になっていきます。歯科医をしながらいろいろなイベントを手がけていました（写真資料1）。

そして90年に入って下北沢では大きな問題が湧き上がったのです。

小田急線が高架になって、今の下北沢が変わってしまうというのです。工事地域には私たちが愛するロックバーが非常に多く、もしこの計画が実行されれば下北沢のロックシーンは壊滅的な打撃を受けるとみんな思いました。

私はシモキタの多くのミュージシャンの協力のもと、この問題を大きく街に広げようということで、下北沢の北口駅前が高架反対、地下化推進ライブを開催し、ビラを配りながら大きくアピールする企画を立てました。駅前の商店街も地下化を望まれていたので、電源やテントもお借りできました。そして、第一回の駅前ライブが開催されたのです。

その後、10回くらい駅前ライブ、テレビ番組の出演、新しくできたタウンホールでのコンサートなどを企画し、この問題を訴えてきました。そして頑張ってきた甲斐もあり、小田急線は下北沢地域では地下になることが決定しました。

役割を終えたと思った私はその後、以前より興味を持ち始めていたバックギャモンの世界に深く傾倒していきます。その後、実績を請われて日本バックギャモン協会の代表に就任し、それから10年くらいバックギャモンを日本で普及させることに努めてまいりました。海外からも多くの選手がやって来ました。その際、築地と下北沢にお連れするのが私の東京観光案内です。

ニューヨークの選手は下北沢を SOHO みたいな街と高く評価していました。

下北沢はそのまま大きく変わらず10年が過ぎていきます。

それが、2002年になって大きな問題が下北沢を襲うことになるのです。

連続立体交差事業の要件として、北口に幅26メートルもの広い道路を通す計画が本格化するという事、そして、この問題を下北沢の人たちはほとんど何も知っていないのです。

これはいけないと思い、数ヵ月後私は、バックギャモン協会を若手に任せてこの問題に取り組むために下北沢へ戻ってきました。そして、5人のメンバーで Save the 下北沢を立ち上げたのです。

3 安全な下北沢の理由

下北沢は深夜でも女性が歩ける安心な街です。なぜそうなったか二つの理由があります。ひとつはピンク系のお店が全くというほどなく、呼び込みのお兄さんもいないことです。実は下北沢は80年代はピンクの街でした。それが音楽、演劇、サブカルチャー的なお店とそれを好むお客さんが多く集まり、ピンク系が成り立ちにくくなりました。

必然的にそういったお店からのみかじめ料を収入とする暴力団系も儲からないので下北沢から撤退していったのです。

もう一つは車が通らないので、夜、街をはしご酒をしてふらついていてもなにものも危なくないことです。もともと夜活動しているのが前出の文化系を好むお客さんたちばかりですし、お店同士横のつながりも強く、みながはしご酒でふらつくことが一種の自警団の役割りを果たしていたのです（写真資料2）。

また、車はある意味、その人の虚勢を表すことが時としてあります。ベンツ等の大型車は虚勢を示さないといけない人たちが愛用するものでもあるのです。そのような大型車が入ってこれなかったことがこの街の安全性をゆっくり醸造していった要因の一つと私は思っています。当然ながら、外部の人間にとって道が狭く逃走経路が複雑な下北沢では犯罪を企てにくいのは間違いないでしょう。

4 日本の未来への危惧

今まで述べてきたように、下北沢はコミュニケーションの空間としてひとつの完成系に近いものを持っています。コミュニケーションレスが嘆かれるこの時代に下北沢はその解決法を教えてくれる街なのかもしれません。下北沢を守ろうと世界中から声が届いているのにそれを無視する行政の態度、そしてそれを後押しする自民、公明の議員たち。その先に美しい国はまずありません。

以上



1. 「下北沢を守ろう！」というテーマで企画したライブイベント
中央が私



2. 下北沢一番街の夜
フレンドリーな雰囲気満ちている